

(氏名) 畔上 一代

著書、学術論文、学会発表等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学会発表) 1. 介護施設職員の就労状況調査—第2報—	共著	2018年7月29日	第31回日本看護福祉学会学術大会	介護保険施設職員について現在の就労状況を把握し、福祉・介護分野の就労環境の見直しに関する示唆を得ることを目的とし取り組んだ。A県内の介護保険施設3ヶ所の職員の就労状況や生活状況について、バーンアウト尺度、主観的健康観、生活状況と自己評価式うつ尺度(SDS)及びソーシャルサポート尺度を用いて調査した。現在の職場に対する継続意向により、「継続群」「非継続群」の2群に分けて分析し、離職に至る経路を考察した。①仕事への不満の中でも、やりがいの無さが、個人的達成感の不足・脱人格化といったバーンアウト兆候に繋がり、抑うつ状態を引き起こしやすい。②職場環境としての人間関係、特に上司からのソーシャルサポートの不足は上司からの評価の低さにも繋がり、仕事のやりがいの無さを感じる要因にも繋がる。③ソーシャルサポートの不足は抑うつ傾向を高め、これらの要因が、介護保険施設職員の慢性的な疲弊、離職へと繋がっている。④介護現場での人員増加とともに、現場で人材を育てる上司職員の育成も必要である。
2. 地域高齢者の生活状況の変化に関する調査—老人大学参加者の5年間の生活状況の比較	共著	2017年6月15日	第22回日本老年看護学会学術集会	2009年から2013年の5年間の老人大学参加者1,271名の生活状況の変化を比較検討した。①基本属性②社会関連性尺度③健康状態および生活状況、について、質問紙による会場での集合調査を行った。一元配置分散分析、 χ^2 検定を行い分析した。その結果、①地域の高齢者の生活状況は便利な器具の使用により個人の時間を確保し行動範囲を広げている②朝食を摂らない人が増えるなど規則的な生活に変化がみられている、という事が明らかになった。高齢期の健康の課題は健康寿命の延伸であり、その基本は3食をバランスよく摂取し、規則的な生活をすることである。高齢期の健康指導として、3回の食事を摂り生活を不

				規則にしないよう指導する必要性が改めて示唆された。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
3. 療養病棟における高齢者の廃用症候群予防ケアに関する看護職のジレンマとその対処	単著	2015年7月5日	第28回日本看護福祉学会学術大会	本研究の目的は、療養病棟における高齢者の廃用症候群の予防のためのケアをする際に看護師が抱くジレンマとその対処を明らかにすることである。療養病棟勤務の経験がある10名の看護職に半構成的面接を行い、語られた内容をコード化、カテゴリー化することにより、ジレンマと対処の関係を検討した。看護職が感じるジレンマとして9カテゴリー、ジレンマに対する対処として12カテゴリーが抽出され、全てのジレンマのカテゴリーに対して何らかの対処がされていた。以上を考察し、療養病棟における廃用症候群の発症予防と悪化防止に向けた看護への示唆が4点得られた。
4. 転倒・転落事故例の検討	単著	1995年7月26日	第21回日本看護研究学会学術集会(日本看護研究学会雑誌 Vol.18 臨時増刊)	大学病院の入院患者の転倒・転落事故を調査・分析した。事故例の約6割が60歳以上、約4割が夜間、約4割が排泄時に発生していた。更に、夜間中の事故では半数以上が排泄時に発生していた。排泄時の事故では、疾患・症状別にどの動作時点で転倒するかの違いが明らかになった。これらの事故の特徴は事故予測や予防対策を講じる上で重要であると思われる。
(学術論文) 1. 介護保険施設職員の就労状況調査ー介護・看護職員を中心とした就労意欲や生活状況に関する検討ー	共著	2018年3月	松本短期大学研究紀要 第27号 45ー51	介護保険施設職員について現在の就労状況を把握し、福祉・介護分野の就労環境の見直しに関する示唆を得ることを目的とし取り組んだ。A県内の介護保険施設3ヶ所の職員の就労状況や生活状況について、バーンアウト尺度、主観的健康観、生活状況と自己評価式うつ尺度(SDS)及びソーシャルサポート尺度を用いて調査し、現在の職場に対する満足度から職場満足群と非満足群に分け、違いについて分析し以下の結果が得られた。①職場や仕事に対する満足度は給与や諸手当に対する満足度と一致する。それは「個人的達成感」である自己効力感にも反映する。

				人間関係についての拒否感は職場環境に影響する。②職場のソーシャルサポート機能では、上司のサポートより、同僚からのサポートの不足が非満足群では強い。個人で行う内容よりチームや共同で行う業務が多い現場において人間関係は仕事の質も左右する。③介護保険施設の職員は満足群、非満足群ともうつ傾向が見られ、介護保険施設の職員は疲弊している状況にある。質の高いケアの提供のためにも、介護保険施設職員の定着に向けた対策は急務である。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
2. 訪問看護ステーションにおける男性看護師の働く中での経験	共著	2018年3月	信州公衆衛生雑誌 第12巻・第2号 99-106	本研究は、未だ就業者数が少ない男性訪問看護師の働く中での経験を明らかにすることを目的に、関東・東海・甲信地域6か所の訪問看護ステーションに勤務している男性訪問看護師10名を対象に半構成的面接による調査を行った。調査内容の逐語録を作成し帰納的に分析した結果、大カテゴリーとして【利用者・スタッフから頼りにされる】【少数派としての孤立】【男性の視点をケアに反映】【記憶に残る存在】等8個が抽出された。これらの結果から、男性訪問看護師は、男性看護師ならではの利点が多い経験をしているが、少数派としての孤立も経験していることが明らかになった。 （共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
3. 地域在住老年者の生活状況の変化に関する調査研究—朝食を摂ることの変化に焦点を当て—	共著	2017年3月	松本短期大学研究紀要 第26号	社会参加活動をしている老年期にある人の生活行動の変化を2009～2013年の5年間1,271名で比較検討した。生活状況の項目においては、朝食の摂取状況に有意差が見られ、朝食を毎日摂ることが減少傾向にあった。高齢者の食事回数が減少することに関連する要因は生活形態など、様々にある。健康維持のために食生活に目を向けた健康指導をより重要視することの必要性が、今回の分析から示唆された。 （共同研究につき本人担当部分抽出不可能）

4. 母性看護学実習における看護経験の実態	共著	2017年3月	松本短期大学研究紀要 第26号	<p>本校の平成24年度から28年度の学生を対象に、母性看護学実習でどのような経験ができていのかその実態を明らかにし、今後の母性看護学実習の効果的な学習方法について検討した。</p> <p>年度ごとの経験項目を比較したところ、経験の有無に明らかな傾向はみられなかった。分娩は3～5割の学生が立ち会うことができ、産褥期の看護では、どの項目でも約8割が経験できていた。また、新生児の看護は、病棟業務として毎日行われている項目において、ほぼ経験ができていた。男女別では、男子は女子よりも、すべての項目において記載なしの割合が多かった。実習施設別の分娩の立ち合い経験は、分娩第1期はA施設の方がB施設よりも経験ができていた。</p> <p>母性看護学実習において学生の経験を増やすには、学生が積極的に実習に臨めるよう意識づけるとともに、臨床スタッフへの協力を得ることが大切である。</p> <p>(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
5. 療養病棟における高齢者の廃用症候群予防ケアに関する看護職のジレンマとその対処	単著	2015年2月17日	長野県看護大学修士論文発表会	<p>本研究の目的は、療養病棟における高齢者の廃用症候群の予防のためのケアをする際に看護師が抱くジレンマとその対処を明らかにすることである。療養病棟勤務の経験がある10名の看護職に半構成的面接を行い、語られた内容をコード化、カテゴリー化することにより、ジレンマと対処の関係を検討した。看護職が感じるジレンマとして9カテゴリー、ジレンマに対する対処として12カテゴリーが抽出され、全てのジレンマのカテゴリーに対して何らかの対処がされていた。以上を考察し、療養病棟における廃用症候群の発症予防と悪化防止に向けた看護への示唆が4点得られた。</p> <p>(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>

6. 予防に向けた転倒・転落事故の要因に関する調査	共著	1998年10月1日	医学書院・看護学雑誌、Vol.62 No.10、1998年	<p>大学病院内科病棟入院患者の転倒・転落事故を調査・分析した。発生場所ではベッドサイド、発生時刻は18時～21時、症状・障害別では神経障害・独歩困難な筋力低下を有する例が多く、事故時の生活動作は排泄動作時の事故が高率であった。排泄動作中の事故では、その8割以上が排泄前であり、時刻は0時～3時が高率、その内の半数は60歳代でADLが自立している患者も3割程度見られた。このような事故の詳しい分析は、より具体的・個別的な事故予防策を講じる上で重要である。</p> <p>(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
(その他)				